

強く願ってお星さまに輝きを見せる。それはつまり、星々に自分の故郷があるということ。世界の中で望んだことをそれぞれに還ることを。

いつもそうして世界を信じた。世界を笑った。

だが、世界に突き放された、孤独の賢者は今でも信じている。

あの星に自分を導いてみせると。孤独を武器に戦ってやると。

思い出に残されたひとりのことをいつものように涙を流すことを大切にしたいのだから。

独りのことをどこまでも信じた、一つのことを貫きたなくなる、そんな世界を創ってみせると。

笑っていた。微笑んでいる。笑っていた？ 微笑んでいる？

わからないのだ。わからない。

だけ。

一緒にいた、お星さまだけは孤独の賢者を一緒にいるわけではなかったよう。

お星さまはゆつくりと天使を呼んで話させた。孤独にいるのはどうしてなのだと。

孤独の賢者はすぐに答えた。

私が、全てを招いたからだ。だから、孤独にいるのだ。

天使は微笑んだ。ならば、と言わんばかりに想い鎌をつりあげて。

孤独からあなたを解放させてあげましょう。ここにある星に一つ祈りなさい。

何故だ？ 賢者は眩く。

なぜ、このような紡ぎ方になるのだ？

私の創った順番ではない。私が創造した者ではない。だが、真実はいつか尽きる。

私は笑った。仕方ないと。仕方ないのなら受け入れようではないか。

わかった。天使とやら。その褥を私に。

天使は微笑んだ。いずれ来るであろう運命に身を委ねた勇気を称えて。

天使がゆつくりと孤独の賢者を抱えて月の向こう側へと飛んでいきました。

だから、星は輝くのです。

ゆつくりとゆつくりと星が輝くのです。